

日本のDXの可能性と課題

内平 直志

目 次

- | | |
|----------------|--------------------|
| 1. DXとは何か | 4. DX推進のための取り組み |
| 2. DXが生み出す価値 | 5. デジタルイノベーションデザイン |
| 3. 日本におけるDXの課題 | 6. 終わりに |

現在、様々な場所でデジタルトランスフォーメーション（DX）が叫ばれているが、その本質は何で、なぜ今の時代に必要なのだろうか。本稿では、DXの生み出す本質的価値を、サプライチェーン・バリューチェーン全体の「ムリ・ムダ・ムラ」の根本的な削減であると捉える。それは、すべてのモノがサイバー空間上でつながり、価値創造が現実空間からサイバー空間にシフトしつつある今だからこそ可能なのである。この革新的な変化点において、企業や組織はDXにより大きなチャンスを得ることができるが、一方でその推進には様々な課題・困難も存在する。ここでは、DX推進の様々な課題・困難を整理し、課題を解決し困難を乗り越える取り組みを紹介する。

1. DXとは何か

近年、デジタルトランスフォーメーション（DX: Digital Transformation）というキーワードが、メディアはもちろん企業や行政や教育機関などの様々な組織の中で頻りに耳にするようになった。実際、デジタルトランスフォーメーションという言葉は、日本経済新聞（朝夕刊・電子版）の紙面で、2021年の1年間で約2,000回（1日5回程度）登場している。DXは、様々な情報通信技術（デジタル技術）により、世の中が大きく変化してい

る状況を表すのに適した便利なビジネス用語なのであろう。しかし、便利な言葉として多用されているものの、実際にDXとはどのようなもので、どのような可能性と課題があるのかに関して、必ずしも共通の理解がなされているわけではない。本稿では、DXの可能性と課題および課題を解決するための取り組みについて紹介したい。

デジタルトランスフォーメーションという用語自体は一般名詞であり、2000年以前から使われていたようだが、「人々の良い生活」のための情報技術の活用という「学問」の視点で、スウェー



内平 直志（うちひら なおし）

北陸先端科学技術大学院大学 副学長 教授 東京サテライト長。1982年東京工業大学理学部情報科学科卒業。同年4月、(株)東芝入社。同社研究開発センター次長、技監を経て、2013年4月より現職。主な著書に、『戦略的IoTマネジメント』（ミネルヴァ書房、2019年）がある。